

# 中学生の友人関係，自尊感情及び学校適応感の相互影響性

赤川 果奈\*・下田 芳幸\*\*・石津 憲一郎

## The relationship between friendships, self-esteem and subjective adaptation to school among junior high school students

Kana AKAGAWA・Yoshiyuki SHIMODA・Kenichiro ISHIZU

### 摘 要

本研究は，中学生を対象とし，友人関係における評価懸念や友人関係満足度，そして内的適応感の指標である自尊感情として自己価値の随伴性と本来感を取り上げ，学校適応感（学校生活享受感情）との相互の関連性について，短期縦断調査によって検討したものである。中学1-3年生169名から得られた3ヶ月間隔の2回のデータについて，交差遅延効果モデルを用いて分析したところ，男子については，評価懸念から自己価値の随伴性に正の，自己価値の随伴性から本来感と学校適応感に負の，そして本来感から評価懸念，自己価値の随伴性，および学校適応感に負の影響が確認された。一方女子については，友人関係満足度から学校適応感に負の，本来感から評価懸念と自己価値の随伴性に負のパスが得られた。

これらの結果を元に，中学生の友人関係，内的適応感，学校適応感の相互の関連性について考察した。

**キーワード：**中学生，評価懸念，本来感，自己価値の随伴性，学校生活享受感情

**keywords：** junior high school student, fear for negative evaluations, sense of authenticity, contingencies of self-worth, enjoyment of school life

### 問題 と 目的

文部科学省の調査（2014）によると，1校あたりのいじめの認知件数は，小学校で5.6件，中学校で5.2件である。また不登校に関しては，全生徒に対する不登校生徒の割合が，小学校では0.4なのに対して，中学校では2.7%，約37人に1人が不登校生徒であると報告されている。以上のことから，特に中学生において，いじめや不登校といった学校不適応に関する問題は深刻であることがうかがわれ，中学生の学校や学級に対する適応感は，今日においても重要な研究テーマであると推測される。

ところで，中学生を含む青年期において，“最も重要な人間関係は友人関係である”（遠矢，1996）とされ，親しい友人の存在は，親密さや関係性への欲求を満たすことで，全般的な well-being を高めることに寄与する（Buhrmester, 1996）。また，“親密な友人関係は，適応や精神的健康を支えるうえで重要な機能をもつ”（岡田，2008）といわれ，古市（2004）が，学校生活享受感情に最も強い影響を与

えるのは級友適応であることを明らかにしていることを踏まえると，友人関係は学校や学級適応を考える際に重要な要因といえる。実際，文部科学省の調査（2014）では，中学生の不登校の一因として，「友人関係をめぐる問題」が挙げられている。さらに，不登校になったきっかけと考えられる状況として全体の3分の1強を占める「学校に係る状況」の中でも，「いじめを除く友人関係をめぐる問題」は約43%となっており，友人関係の影響度の高さがうかがわれる。

一方で，中学生の友人関係については，“互いの内面を開示することなく，傷つけあうことがないよう，表面的に円滑な関係をとるような友人関係”（岡田，2002）といわれるように，傷つけ合わないことやその場の楽しさを重視する点も特徴的であるとされる。以前から中学生の人間関係については，自分の本音が問われるようなことは避け，自分を守ろうとする“自己防衛的なつきあい方”（落合・佐藤，1996）があり，そして類似性を言葉で確かめあうことを基本とした，内面的な互いの類似性の確認による一体感（凝集性）を特徴とする中学生あたりによく見られる仲良しグループは“チャムグループ”（保坂，1996）と表現されることもあった。最近で

\* 2015年3月卒業

\*\* 佐賀大学文化教育学部

も、“お互いに気を遣いあう友人関係を形成”（中西，2008）や“異質な存在にみられることに対する不安（被異質視不安）”や、異質な存在を拒否する傾向（異質拒否傾向）”（高坂，2010）を挙げるものもある。

このような、中学生の友人関係を特徴づけるものとして本研究では、評価懸念に着目した。評価懸念とは“他者からの評価に対する心配や、否定的に評価されるのではないかという予測に対する苦痛、心配の程度”（Watson & Friend, 1969），あるいは“他者からの否定的な評価を受けること、およびそれを予測することに対して感じる不安の程度の個人差”（山本・田上，2002），とされる。

評価懸念は、学校生活の中で級友や教師とうまくやっていきたいという思いが前提となって生じるとされ（山本・田上，2002），一見適応的な概念である。しかし、他者の前で自分らしく振る舞うことが困難であるため、外顯的な行動が不適応的でなかったとしても、本人は主観的に「つらい」「疲れる」と感じている可能性があること、社会的に比較されるような“脅威的状况”を回避しがちであるために（Friend & Gilbert, 1973），他者と関わることを避ける傾向があること、そして周囲から把握しづらいことから、学校不適応を高めるリスク要因となりうる可能性が指摘されている（山本，2007）。そこで本研究では、友人関係における評価懸念について取り上げ、友人関係に関する補足的な情報として実際の友人関係満足度も調査し、以降に述べる心理的変数との関連を検討することとした。

なお先行研究では、中学生の友人関係において性差が報告されている。例えば落合・佐藤（1996）の研究では、男子は、自分に自信をもち友人と自分は異なる存在であると認識し、女子は、友人と共感・共有しあい、お互いがひとつになるような関係を望むことが明らかとなっている。また榎本（1999）は、男子は活動を共有することが中心で、女子は親密な関係を作ることが中心であることを明らかにしている。これらのことから、男子と女子とでは友人関係の構築の仕方や友人に求めることが異なると考えられるため、性差についても検討していくことが求められよう。

さて、中学生の学校適応感については、こういった友人関係に加えて、個人の内的適応感である自尊感情も関与している（松下・石津・下田，2011）。

そしてこの自尊感情については近年、概念の整理が提案されており、例えば伊藤・川崎・小玉（2011）は、外的な成果や評価に随伴して生じるもの、自分らしくいられることで自然と発生するものとに分けて論じている。そこで本研究では、伊藤ら（2011）の指摘を踏まえて、前者に該当する自尊感情の側面として“自己価値の随伴性”を、後者に該当するものとして“本来感”を取り上げることとした。

自己価値の随伴性<sup>1</sup>とは、“特定のできごとや他者評価などの外的要因によって自分の価値（自尊感情）が影響される程度”とされ（Crocker & Wolfe, 2001），自律性や人間関係、精神的健康のコスト要因でありほか（Crocker & Knight, 2005），ストレスとの関連も明らかとなっている（Burwell & Shirk, 2006）。また、いじめを含む不適応行動を促進する可能性が指摘されており（Crocker, 2002），さらに、他者からの承認に自己価値が随伴していると、他者からの否定的フィードバックにより、自尊感情や快感情が低下し不快感情は増加する、という研究もある（Park & Crocker, 2008）。日本においても、大学生を対象とした研究で、自己価値の随伴性が自律性と負の関連を示すといった報告があり（伊藤・小玉，2006），自律的な行動が抑制される結果、学校適応感が低下することが予想される。

続いて本来感に関しては、外的な価値基準ではなく自己内の価値基準による自尊感情であり、自分自身について“これでよい（good enough）”と捉える感覚、あるいは“自分らしくある感覚”とされる（伊藤・児玉，2005）。この本来感について、中学生を対象に検討した折笠・庄司（2010）によると、本来感が高い者は学級満足度が高いことから、生徒の本来感を高めるような教師の働きかけが、学級や学校での不適応問題の解決の一助となり得る、とされる。さらに本来感は、ストレス反応と負の関連を示すという報告もあり（鈴木・小川，2008），本来感と学校適応感の関連性を検討することは有意義であると思われる。

最後に、本研究の研究デザインについて述べる。ここまで取り上げた先行研究は主に、1時点の調査で同時に得られたデータを用い、心理的変数間の関連を検討している。しかし高比良・安藤・坂元（2006）によると、1時点の測定のみでは時間的因果関係が保証されず、複数の同値モデルが存在してしまい、因果関係の想定が困難になる、といった

問題がある。

したがって、時間的先行性を加味できるパネル調査デザインを用いることにより、本研究で取り上げる変数間のグレンジャー的因果関係が検討できる。なお、本研究に関連する2波のパネル調査デザインを用いた研究はこれまでのところ見当たらないため、調査の間隔をどの程度にすればよいか、という点に関する知見がない。そこで本研究では、7月中旬と10月中旬という、約3ヶ月の期間を開けることとした。この設定により、1学期の後半における生徒の状態が、2学期が半ば頃の状態を予測するのに役立つ、と判断したためである。

以上より本研究では、主観的な学校適応感と、友人関係における心理的要因としての評価懸念や友人関係満足度、そして内的適応感の指標である自尊感情の異なる側面としての本来感と自己価値の随伴性の相互影響性について、時間的変化を加味し、性差を考慮して検討することを目的とする。

## 方 法

### 調査協力者および調査時期

学校長の許可が得られた中部地方の公立中学校に通う1—3年生198名に協力を依頼した。調査の1回目(Time1)は2014年7月中旬、2回目(Time2)は同10月中旬に行われ、2回の調査とも協力し記入ミスのない169名(男子89名、女子80名、有効回答率85.4%)のデータを分析に用いた<sup>2</sup>。

### 使用した尺度

**本来感** 適応的な自尊感情の指標として、伊藤・小玉(2005)が作成したものを元に鈴木・小川(2008)が中学生に適用した本来感尺度を使用した。本尺度は、“いつでも揺るがない「自分」を持っている”といった、本来感に関する7項目から構成され、1因子構造である。各項目に「あてはまらない」から「あてはまる」の4件法で回答を求め、それぞれの得点を1—4点(逆転項目は4—1点)とした。したがって得点が高くなるほど、自分らしさの感覚を強く持っている、と解釈される。

**自己価値の随伴性** 外的基準で変動する自己価値の評価を測定するため、思春期用 Self-Worth Contingency Questionnaire (SWCQ) 日本語版(石津・下田, 2012; 以下 SWCQ と略記)を用いた。本尺度は、“自分の見た目が良いかどうかは、

自分の価値にとっても影響する”といった、自己価値の随伴性に関する11項目から構成され、1因子構造である。各項目に「あてはまらない」から「あてはまる」の4件法で回答を求め、それぞれの得点を1—4点とした。したがって得点が高くなるほど、自分が評価する自己価値の基準を外的要因に置く傾向が強くなる、と解釈される。

**評価懸念** 友人からの評価を気にする程度を測定するため、評価懸念尺度(山本・田上, 2001)を用いた。本尺度は“人が話をしているのを見ると、自分のことを話しているのではないかと気になる”といった、評価懸念に関する10項目から構成され、1因子構造である。各項目に「あてはまらない」から「あてはまる」の4件法で回答を求め、それぞれの得点を1—4点とした。したがって得点が高くなるほど、友人からの視線や評価、と解釈される。なお本尺度は本来、特定の他者を想定していないが、本研究では教示文に「友人」と明記した。

**友人関係満足度** 友人関係の主観的な良好さを測定するため、友人関係満足度尺度(加藤, 2001)を用いた。本尺度は“周囲の人たちに受け入れられていると感じる”といった友人関係満足度に関する6項目から構成され、1因子構造である。各項目に「あてはまらない」から「あてはまる」の4件法で回答を求め、それぞれの得点を1—4点とした。したがって得点が高くなるほど、自分が友人に受け入れられていると評価している、と解釈される。

**学校生活享受感情** 主観的な学校適応感を測定するため、学校生活享受感情測定尺度(古市, 2004)を用いた。本尺度は、“学校が楽しくて、1日があっという間にすぎてしまう”といった、学校生活享受感情に関する13項目から構成され、1因子構造である。各項目に「あてはまらない」から「あてはまる」の4件法で回答を求め、それぞれの得点を1—4点(逆転項目は4—1点)とした。したがって得点が高くなるほど、学校生活を肯定的に評価し学校適応感が高い、と解釈される。

### 手続き

調査協力が得られた学校において、フェイスシートと尺度を一組にまとめた質問紙を、帰りの会など時間に、クラス担任を通じて一斉に実施し、その場で回収した。表紙には、調査目的の説明、性別、学年および出席番号を問う項目とともに、協力は任意であること、集計された平均値などを用いて学校生

活をよりよくするために使用されること、出席番号は2回の調査で同一回答者の一致を図るためだけに用いられること、個人の回答は調査者以外に知られないこと、そして回答は任意であり、協力を拒否した場合でも不利益は一切被らないことが明記され、調査時に口頭でも同様の説明がなされた。また調査協力へのお礼として、ストレスマネジメント教育（竹中・富永，2011）のリラクセーション技法をまとめたプリントを、2回目の調査後に生徒へ配布した。

## 結 果

本研究は、帰無仮説の棄却を危険率5%で判断した。また分析にはR(3.2.0)のpsychパッケージ(Revelle, 2013)およびlavaanパッケージ(Rosseel, 2012)を使用した。なお各尺度の合計得点を項目数で除したものを、各尺度得点として使用した。

### 使用した尺度得点の基礎統計

各尺度得点の基礎統計として、男女ごとの各下位尺度の平均値と標準偏差を算出し、性別と測定時期を要因とする2要因分散分析を行った(Table 1)。

まず、すべての下位尺度得点について、Mendozaの多標本球面性検定の結果は非有意であった( $\lambda = .28-.98$ , いずれも $p > .05$ )。

分散分析の結果、本来感における測定時期の主効果と交互作用が有意であり(順に $F(1,167) = 4.03$ ,  $\eta^2 = .02$ ,  $F(1,167) = 5.23$ ,  $\eta^2 = .03$ , いずれも $p < .05$ )、交互作用の多重比較の結果、Time2の女子が、Time1の女子およびTime2の男子と比較して得点が低かった。性別の主効果は有意でなかった

( $F(1,167) = 1.74$ ,  $p > .05$ ) また、評価懸念における性別の主効果が有意であり、女子が男子より高かった( $F(1,167) = 11.42$ ,  $p < .05$ ,  $\eta^2 = .06$ )。測定時期の主効果と交互作用は有意でなかった(順に $F(1,167) = 1.11$ ,  $F(1,167) = 0.90$ , いずれも $p > .05$ )。SWCQ、友人関係満足度および学校生活享受感情は、性別および測定時期の主効果、交互作用ともに有意でなかった(SWCQ: 順に $F(1,167) = 0.04$ ,  $F(1,167) = 1.64$ ,  $F(1,167) = 0.61$ ; 友人関係満足度: 順に $F(1,167) = 0.97$ ,  $F(1,167) = 1.56$ ,  $F(1,167) = 0.73$ ; 学校生活享受感情: 順に $F(1,167) = 0.09$ ,  $F(1,167) = 0.65$ ,  $F(1,167) = 0.39$ , いずれも $p > .05$ )

また、尺度の信頼性を確認するために、尺度ごとに内的一貫性( $\omega$ 係数)を算出した。その結果、Time1, Time2の順に、本来感はいずれも $\omega = .91$ , SWCQは $\omega = .93, .94$ , 評価懸念は $\omega = .94, .95$ , 友人関係満足度は $\omega = .92, .93$ , そして学校生活享受感情は $\omega = .94, .95$ であり、いずれも分析に耐える内的一貫性を有していると判断した。

### 各変数の単純相関

各変数の関連性を確認するため、男女ごとに相関係数を算出した(Table 2)。その結果、男女ともに、大部分の変数間の相関係数が有意であった。

したがって、本研究で用いた変数間には関連がある可能性が高いと判断し、交差遅延効果モデルを用いて、より詳細な関連性を分析することとした。

### 交差遅延効果モデルにおける各変数の関連性

変数間の関連性をより詳細に検証するため、交差遅延効果モデルを用いて関連性を分析した。

男女別に変数間の配置不変性を検証したところ、

Table 1 男女別の各尺度得点の平均値、標準偏差および分散分析結果

	男子 ( $n=89$ )		女子 ( $n=80$ )		F 値		
	Time1	Time2	Time1	Time2	性別	測定時期	交互作用
本来感	2.99 (0.64)	3.00 (0.61)	2.99 (0.69)	2.76 (0.75)	1.74 (0.01)	4.03 * (0.02)	5.23 * (0.03)
SWCQ	2.14 (0.62)	2.04 (0.66)	2.12 (0.64)	2.10 (0.67)	0.04 (0.00)	1.64 (0.01)	0.61 (0.00)
評価懸念	1.70 (0.66)	1.77 (0.68)	2.10 (0.80)	2.10 (0.79)	11.42 * (0.06)	1.11 (0.01)	0.90 (0.01)
友人関係満足度	3.07 (0.61)	2.96 (0.71)	2.93 (0.72)	2.91 (0.74)	0.97 (0.01)	1.56 (0.01)	0.73 (0.00)
学校生活享受感情	2.64 (0.66)	2.58 (0.74)	2.64 (0.69)	2.63 (0.73)	0.09 (0.00)	0.65 (0.00)	0.39 (0.00)

平均値下の( )は標準偏差、F値下の( )は効果量 $\eta^2$ , \* $p < .05$



Table 2 男女別の各尺度得点の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Time1										
1 本来感	—	-.08	-.25 *	.21	.26 *	.48 *	-.24	-.33 *	.25 *	.32 *
2 SWCQ	-.11	—	.58 *	-.34 *	-.19	-.18	.59 *	.54 *	-.17	-.11
3 評価懸念	-.16	.37 *	—	-.48 *	-.41 *	-.16	.47 *	.82 *	-.33 *	-.29 *
4 友人満足	.42 *	-.15	-.17	—	.68 *	.24 *	-.33 *	-.43 *	.56 *	.39 *
5 学校享受	.33 *	-.08	-.11	.48 *	—	.25 *	-.27 *	-.42 *	.47 *	.78 *
Time2										
6 本来感	.52 *	-.24 *	-.18	.27 *	.21 *	—	-.18	-.32 *	.58 *	.44 *
7 SWCQ	-.33 *	.38 *	.41 *	-.25 *	-.10	-.14	—	.47 *	-.10	-.21
8 評価懸念	-.35 *	.39 *	.76 *	-.20	-.10	-.31 *	.46 *	—	-.35 *	-.34 *
9 友人満足	.31 *	-.19	-.07	.49 *	.23 *	.49 *	-.04	-.21 *	—	.61 *
10 学校享受	.13	-.21 *	-.06	.38 *	.69 *	.33 *	-.06	-.11	.38 *	—

注) 友人満足：友人関係満足度，学校享受：学校生活享受感情

対角線左下が男子，右上が女子 \* $p < .05$

有意なパスについて男女で異なる結果が得られた。

そのため，多母集団同時分析ではなく，男女で異なるモデルを検討した。

男子で得られた交差遅延効果のパスに関しては，本来感と SWCQ の間で相互に有意な負のパスが得られた（本来感から SWCQ に  $\beta = -.26$ ；SWCQ から本来感に  $\beta = -.15$ ，いずれも  $p < .05$ ）。

また，本来感から評価懸念に（ $\beta = -.23$ ， $p < .05$ ），そして学校生活享受感情に（ $\beta = -.16$ ， $p < .05$ ），それぞれ有意な負のパスがそれぞれ得られた。

さらに，SWCQ から学校生活享受感情にも有意な負のパスが得られた（ $\beta = -.14$ ， $p < .05$ ）。

さらに，評価懸念から SWCQ に有意な正のパスが得られた（ $\beta = .27$ ， $p < .05$ ）。

その他の変数間には，交差遅延効果および同時効果は確認されなかった。なおモデル適合度は，絶対的指標の SRMR = .049，増加的指標の CFI = 1.000，俟約的指標の RMSEA = .000 [90%CL = .000-.089] であり，データのモデル適合が良好であることを示す値が得られた。以上をまとめたものを figure 1 に示す。

続いて女子に関しては，本来感から SWCQ に（ $\beta = -.19$ ， $p < .05$ ），あるいは評価懸念に（ $\beta = -.13$ ， $p < .05$ ），それぞれ有意な負のパスが得られた。

また，友人関係満足度から学校生活享受感情にも有意な負のパスが得られた（ $\beta = -.28$ ， $p < .05$ ）。その他の変数間には，交差遅延効果および同時効果は確認されなかった。なおモデル適合度は，絶対的指標の SRMR = .085，増加的指標の CFI = .996，俟約的指標の RMSEA = .027 [90%CL = .000-.087]

であり，データのモデル適合が良好であることを示す値が得られた。以上をまとめたものを figure 2 に示す。

## 考 察

男女ともに，Time1 の本来感は，Time2 の SWCQ と評価懸念に負の影響を及ぼしていた。これは，1 学期末に自分らしさの感覚が高ければ，2 学期半ばの時点で，自己価値の評価が外的基準で左右されにくくなったり，他者からの評価をあまり気にしなくなったりする，と解釈できる結果である。

本来感は先に述べたように，外的でなく自己内の価値基準による自尊感情であり，自分自身について“これでよい (good enough)”と捉える感覚である。したがって，外的基準に自己価値を付随させる自己価値の随伴性や，他者評価を気にする程度である評価懸念とは，いわば対極的な構成概念であることから，妥当な結果といえる。評価懸念の高い子どもは，「自分は他者からどう評価されているのか」とか「悪く評価されたらどうしよう」と，自分が傷つくおそれのある状況に対し，過剰に心配してしまう傾向にあるが，自分らしさの感覚が高い場合には，こういった心配する傾向は抑制される可能性がある。

この結果に関連して，田中・下田 (2013) は，中学生における本来感が，友人に対する独立的態度に影響することを報告している。この独立的態度を測定する項目には，“友達と違う意見でも自分の意見はきちんと言う”といった，安易に友達と同調するのではない，アイデンティティの形成にも関わる側

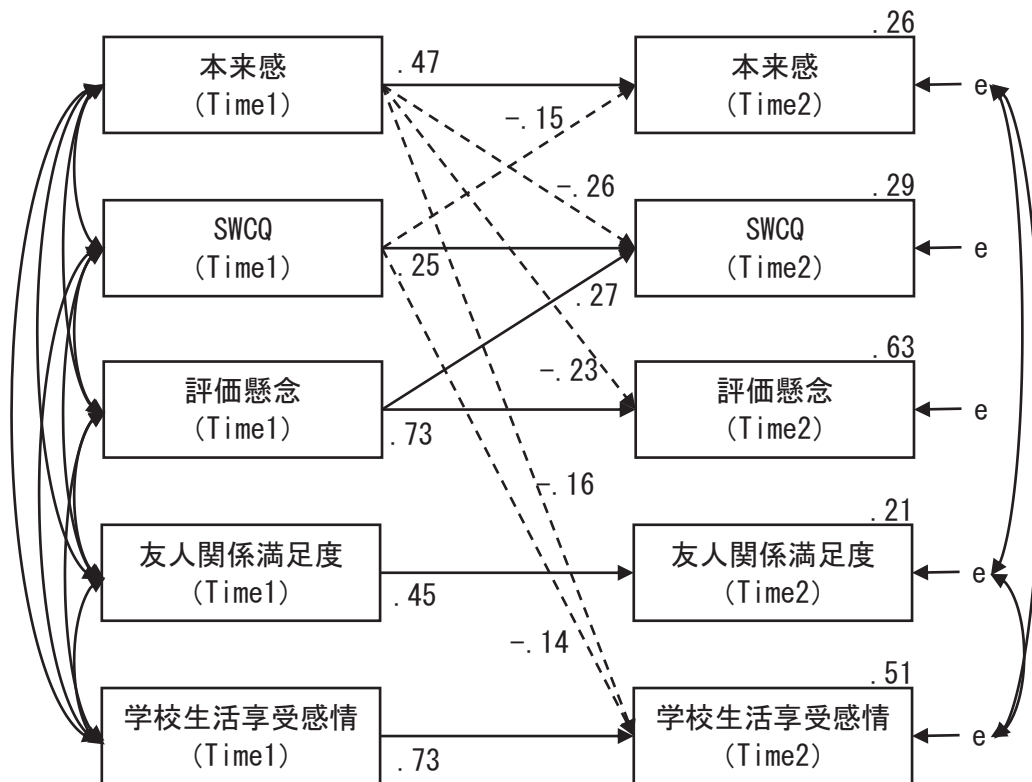


figure 1 男子における交差遅延効果モデルの分析結果  
(SRMR=.049, CFI=1.000, RMSEA=.000 [90%CL=.000-.089])  
(実線は正の、破線は負の有意なパスであることを示す)

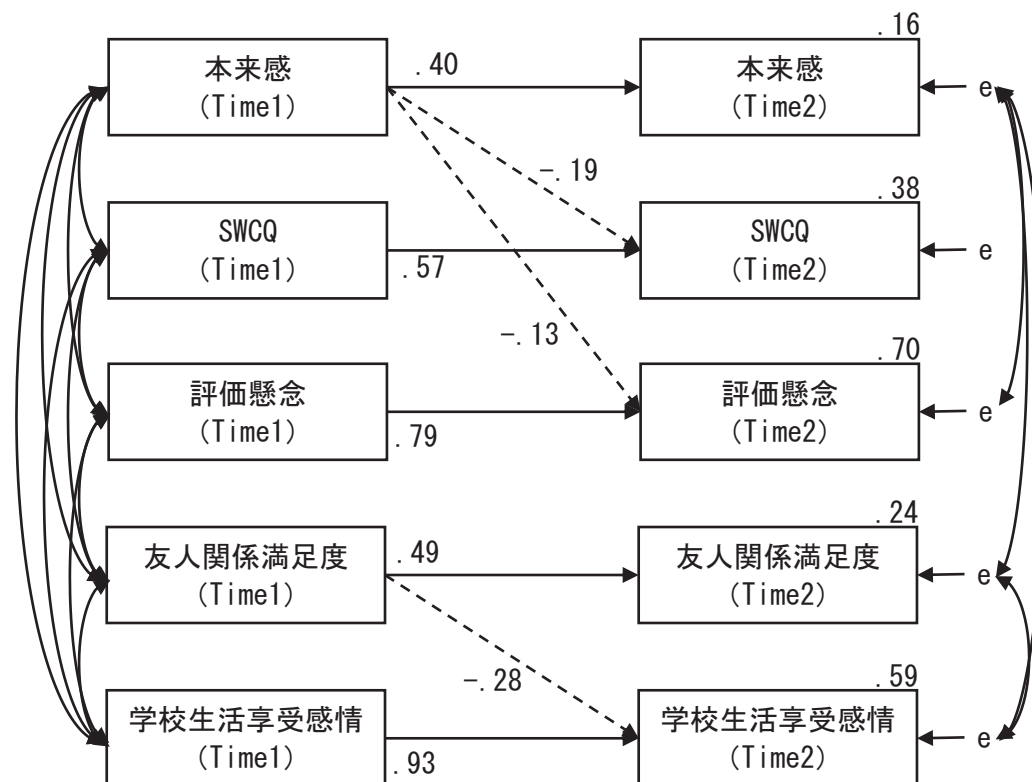


figure 2 女子における交差遅延効果モデルの分析結果  
(SRMR=.085, CFI=.996, RMSEA=.027 [90%CL=.000-.087])  
(実線は正の、破線は負の有意なパスであることを示す)

面も含まれている。この知見を踏まえると、自己の確立がなされていく過程において、自己評価の基準を外的要因に帰属させるのではなく、次第に内在化されていくことが考えられる。

また、同じく田中・下田（2013）は、本来感が友人に対する信頼感や安定的な態度にも正の影響を及ぼすことを明らかにしている。このような、友人に対する肯定的な態度や信頼感が形成されることに伴い、友人からの評価を過度に懸念する傾向が低下したことが、本来感から評価懸念への抑制的な影響として観測された可能性もある。

本研究の対象者である中学生は、思春期前期に該当し、自分らしさを確立する最中であるといえる。したがって、自己像が揺れやすい世代であるといえ、これは、本来感の安定的影響を示す Time1 から Time2 へのパス係数が高くないことや、Time2 の本来感における決定係数の低さからも示唆されるものである。アイデンティティの形成プロセスにおいては、ある程度の“危機”に直面することもまた重要であるとされる（Marcia, 1996）。したがって本来感が単純に高いことが望ましいというわけではないものの、本研究で示された、本来感から他の心理的側面への影響する点については、特に学校臨床支援に際して留意することも重要であると思われる。なお男子のみ、Time1 の SWCQ から Time2 への本来感への有意な負のパスも確認された。これは、1 学期末に自己価値の随伴性が高い場合、2 学期半ばの自分らしさの感覚が低下することを示唆するものである。先述の結果も併せると、男子は、本来感と自己価値の随伴性は相互に影響を及ぼし合っている、といえる。

自己価値の随伴性に関する先行研究では、これまで性差については検討がなされていないため、男子にのみこのような結果が示された理由は不明であるが、先述のように、自己価値の随伴性と本来感是对極的な概念であることから、自己価値の随伴性が本来感へ直接的に抑制的な効果を及ぼしていることが考えられる。あるいは、中学生の学業における自己価値の随伴性に関する研究によると、英語における仮想的失敗場面では、自己価値の随伴性が、状態自尊感情に負の影響を及ぼし、状態自尊感情が直接的に、あるいは無能感または後悔を媒介して、内発的動機付けに負の影響を及ぼす、といったプロセスが示されている（大谷・中谷, 2010）。この結果

を参考にすると、本研究で取り上げた全般的な自己価値の随伴性に関しても、状態的な自尊感情や後悔といった心理的特性を介して、本来感を低下させているのかもしれない。そして、こういったプロセスにおいて男女差が存在する可能性が想定される。今後は、性差が生じたり、性差がその後の他の心理的変数へ影響を及ぼすプロセスの違いについて検討する必要があるだろう。

次に、男子にのみ、Time1 の評価懸念が Time2 の SWCQ に正の影響を及ぼす、という分析結果が得られた。これは、1 学期末に他者からの評価を気にする程度が強いと、2 学期半ばの自己価値の随伴性が高くなる、と解釈できるものである。

評価懸念が高い人の特徴として Friend & Gilbert (1973) は、社会的に比較されるような状況を“脅威的状况”とみなしやすい点を挙げている。自己価値の判断基準を内的要因に帰属させることで、他者からの否定的評価で生起する心理的なダメージが大きくなりやすいことが想定されることから、自己価値の判断基準を外基準におくことにより、自己の心理的な傷つきを予防しようとしているのかもしれない。また、大学生を対象とした調査で、期待に沿う努力が自己価値の随伴性を高める、という知見があり（益子, 2009）、本結果はこれと類似するものという捉え方もできるであろう。

あるいは評価懸念は、先に触れたように、学校生活の中で級友や教師とうまくやっていきたいという思いが前提となって生じうる、とされる（山本・田上, 2002）。こういった対人関係に対する動機づけが高い生徒は、友人からの評価という外的基準を自己の評価に結びつけやすくなるため、自己価値の随伴性が高くなることも考えられる。中学生の仲間集団のサイズは男子の方が女子より大きいことから（石田・小島, 2009；有倉, 2011）、男子は多様な場で評価懸念を経験することとなり、それが自己価値の随伴性を高めていることも考えられる。

なお、男子についてはさらに、SWCQ と本来感が学校生活享受感情に対して負の影響を及ぼしていた。これは、1 学期末の自分らしさの感覚や自己価値の随伴性が高い場合、2 学期半ばの学校適応感が下がることを示唆する結果である。

海外の大学生において、他者からの承認に関する自己価値の随伴性が高いと、他者からの否定的なフィードバックを得た際に、自尊感情や快感情が低下し、

不快感情が増加することを示した研究がある (Park & Crocker, 2008)。このことから、他者からの否定的なフィードバックを経験することも多い学校という場では、自己価値の随伴性が高い生徒は、自尊感情や快感情の低下や不快感情の増加を経験しやすく、そういった経験をしやすい学校生活に対する快感情も低下しやすいのかもしれない。

一方本来感が学校生活享受感情に否定的な影響を及ぼした点については、日常生活に関する様々なルールが存在する中学校生活では、自分らしさを抑制しなければならない場面も多く存在するため、自分らしさの感覚が高い生徒は、学校のルールとの葛藤も多く経験し、その結果、学校生活享受感情が低下するのかもしれない。先にも触れたが、本来感の内容や機能などについては、今後さらに検討していく必要があるだろう。

一方女子に関しては、Time1 の友人関係満足度から Time2 の学校生活享受感情に対する有意な負のパスが得られた。この結果は、1 学期末に友人関係満足度が高いと、2 学期中旬の学校生活享受感情が低くなる、と解釈できる結果である。

この結果が得られた理由として、2 つの可能性が考えられる。第一に、友人関係における満足度が表面的であるために主観的な学校適応感が低下した、という場合である。橋詰 (2010) は、中学生という時期は同性の親しい友人との同質性を求める段階であり、自分を素直に率直に表現するには困難が伴い、なかなか本音を出すことが難しい時期である、と指摘している。また、この時期の友人との付き合い方の特徴の一つとして保坂 (1993) は、“自分が属しているグループからはみ出ないように並々ならぬ努力をしている”ことを指摘しており、藤井 (2001) は“相手と親密な関係を持ちたい一方で傷つけ合うことを恐れ、適度な心理的距離を模索して揺れ動いている”と述べている。さらには“互いの関係を壊さないように一生懸命気を遣い、相手との距離をはかることに心を砕く子供が多い” (伊藤, 2006) との指摘もあることを考慮すると、中学生は総じて、自分の本音を抑えてでも友人に合わせようとする自己防衛的な傾向があると想定される。

このようなチャムグループ的要素は、特に女子に強いとされ (保坂・岡村, 1986)、黒沢・有本・森 (2005) の調査によると、中学生女子のうち、仲間への同質性への欲求が高い場合、ストレス反応も高

くなっている。このことから、思春期女子に特徴的なチャムグループ的友人関係は、女子にとって必ずしも本意ではない、表面的な適応行動である可能性が想定される。そのため、友人とは良好な関係を築くことができ、表面上は満足感が得られたとしても、それは同時にストレスフルな状況でもあり、そういった場を経験する学校そのものに対する適応感は、結果として低下してしまうのかもしれない。

もう一方の可能性としては、満足なほどに友人間の凝集性が高まったために学校適応感が低下した、という場合である。例えば、中学生女子については、自分が所属する仲間集団への適応感と排他性欲求が正の関連を示すとされる (有倉, 2011)。このことから、凝集性の高い仲間集団が形成されると、他の仲間集団に対しては排他的な態度が形成されて心理的な距離が生まれてしまい、行事や学級活動といった、仲間集団の枠を超えて取り組む必要がある学校生活については、十分な満足感や充実感を得られないことが考えられる。あるいは、仲間集団の価値観が学校のルールや規範と合致しない場合、ルールの逸脱による教師からの叱責といった不快な体験をしやすくなり、結果として学校生活享受感情が低下するのかもしれない。これらの可能性については、今後さらに検討していく必要があるだろう。

以下、本研究の課題でこれまでに触れていないものを挙げる。まず、調査の実施間隔が挙げられる。本研究は 3 ヶ月間隔で実施したデータを用いたが、測定間隔が適切でないと、本来存在するはずの因果関係が検出されないことがある (岡林, 2006)。本研究では約 3 ヶ月の間隔を開けて実施しているが、関連が示されなかった変数を中心に、測定間隔を縮めて、例えば 1 ヶ月程度の測定間隔で再検討することも有意義と思われる。

また、本研究で得られた SWCQ に関する結果は、学校適応の観点からは望ましくない結果が多かったが、学業における自己価値の随伴性について、学業に対する内発的興味と正の関連を示す、という報告もある (大谷・中谷・伊藤・岡田, 2012)。このように、自己価値の随伴性は、学校適応を阻害するのみと一律に結論付けることはできないことから、本研究で取り上げていない他の心理的変数との関連についても、今後吟味する必要があるだろう。

以上の課題等を検討するなどして、中学生の学校適応感に関するさらなる知見の蓄積が求められる。



〈注〉

- 1 自己価値の随伴性については、随伴させる領域ごとに検討する立場 (Crocker & Wolfe, 2001 ; 大谷・中谷, 2010a など) と、全般的な随伴傾向について検討する立場 (Burwell & Shirk, 2006 ; 伊藤・小玉, 2006) がある。本研究は中学生の自己価値の随伴性の一般的な傾向を検討するため、後者の立場を取っている。
- 2 記入漏れは項目の約 2 割で発生しており、特定の項目や学級には偏っていなかった。よって、記入漏れは完全にランダムな欠測で、除外しても分析結果への影響は極めて低いと判断した。また、途中から回答をやめたものも述べ 9 名分確認され、調査協力の任意性も保たれていたと思われる。

〈付記〉

ご協力くださいました学校関係者および生徒の皆さんに心より感謝申し上げます。

引用文献

- Buhrmester, D. (1996). Need fulfillment, interpersonal competence, and the developmental contexts of early adolescent friendship. In W. M. Bukowski, A. F. Newcomb, & W. W. Hartup (Eds.) *The company they keep : Friendship in childhood and adolescence*. New York: Cambridge University Press. pp.158-185.
- Burwell, R. A., & Shirk, S. R. (2006). Self processes in adolescent depression: The role of self-worth contingencies. *Journal of Research on Adolescence*, **16**, 479-490.
- Crocker, J., & Knight, K. M. (2005). Contingencies of self-worth. *Current directions in psychological science*, **14**, 200-203.
- Crocker, J. (2002). Contingencies of self-worth: Implications for self-regulation and psychological vulnerability. *Self and Identity*, **1**, 143-149.
- Crocker, J., & Wolfe, C. T. (2001). Contingencies of self-worth. *Psychological Review*, **108**, 593-623.
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, **47**, 180-190.
- Friend, G. W., & Gilbert, J. (1973). Threat and fear of negative evaluation as determinants of locus of social comparison. *Journal of psychology*, **41**, 328-340.
- 藤井恭子 (2001). 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究, **49**, 146-155.
- 古市裕一 (2004). 小・中学生の学校生活享受感情とその規定要因 岡山大学教育学部研究集録, No.126, 29-34.
- 橋詰郁恵 (2010). 中学生における“自己”および“友人”の見せかけの自己表現に対する認知とストレス反応の関連 九州大学心理学研究, **11**, 185-193.
- 保坂一乙 (1993). 中学・高校のスクール・カウンセラーの在り方について——私立女子校での経験を振り返って—— 東京大学教育学部心理教育相談室紀要, **15**, 65-76.
- 保坂 亨 (1996). 子どもの仲間関係が育む親密さ——仲間関係における親密といじめ—— 現代のエスプリ, No.353, 43-51.
- 保坂 亨・岡村達也 (1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討: ある事例を通して 心理臨床学研究, **4**, 15-26.
- 石田靖彦・小島 文 (2009). 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連——仲間集団の形成・所属動機という観点から—— 愛知教育大学研究報告 (教育科学編), **58**, 107-113.
- 石津憲一郎・下田芳幸 (2012). 思春期用 Self-Worth Contingency Questionnaire (SWCQ) 日本語版の作成 日本学校心理学会第14回大会発表論文集, 52.
- 伊藤正哉・川崎直樹・小玉正博 (2011). 自尊感情の3様態——自尊源の随伴性と充足感からの整理——心理学研究, **81**, 560-568.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, **53**, 74-85.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2006). 大学生の主體的な自己形成を支える自己感情の検討——本来感, 自尊感情ならびにその随伴性に注目して—— 教育心理学研究, **54**, 222-232.
- 伊藤美奈子 (2006). 不登校の子の理解と支援(2)——不登校の子どもの気持ち—— 児童心理, No.60, 697-703.
- 加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, **49**, 295-304.
- 高坂康雅 (2010). 青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向——青年期における変化

- と友人関係満足度との関連——教育心理学研究, **58**, 338-347.
- 黒沢幸子・有本和晃・森 俊夫 (2003). 女子中学生の仲間関係のプロフィールとストレスとの関連について 目白大学人間社会学部紀要, **1**, 13-21.
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality & Social Psychology*, **3**, 551-558.
- 益子洋人 (2009). 青年期における過剰適応傾向に関する研究——外的適応行動と自己価値の随伴性, 本来感との関連—— 文学研究論集 (明治大学), **30**, 243-251.
- 松下良策・石津憲一郎・下田芳幸 (2011). 学級適応感を支える要因の検討——自尊感情, 非排他性, 肯定的フィードバックの観点から—— 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, **5**, 61-68.
- 文部科学省 (2014). 平成25年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」等結果について 文部科学省2014年10月  
<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/26/10/1351936.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/1351936.htm)> (2014年12月25日取得)
- 中西新太郎 (2008). 少年少女の孤立と友だち階層制 生活指導, No.50, 42-49.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達のつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- 大谷和大・中谷素之 (2010). 学業における自己価値の随伴性が内発的動機づけ低下に及ぼす影響プロセス——状態的自尊感情と失敗場面の感情を媒介として—— パーソナリティ研究, **19**, 206-216.
- 大谷和大・中谷素之・伊藤崇達・岡田 涼 (2012). 学級の目標構造は自己価値の随伴性の効果を調整するか——内発的興味と自己調整学習方略に及ぼす影響—— 教育心理学研究, **60**, 355-366.
- 岡林秀樹 (2006). 発達研究における問題点と縦断データの解析方法 パーソナリティ研究, **15**, 76-86.
- 岡田 涼 (2008). 親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築 教育心理学研究, **56**, 575-588.
- 岡田 努 (2002). 友人関係の現代的特徴と適応感および自己像・友人像の関連についての発達の研究 金沢大学文学部論集 (行動科学・哲学篇), **22**, 1-38.
- 折笠国康・庄司一子 (2010). 中学生の本来感の検討——学級風土による違いとの関連から—— 共生教育学研究, **4**, 13-22.
- Park, L. E., & Crocker, J. (2008). Contingencies of self-worth and responses to negative interpersonal feedback. *Self and Identity*, **7**, 184-203.
- Revelle, W. (2013). *psych: Procedures for Personality and Psychological Research*. Northwestern University, Evanston, Illinois, USA.
- Rosseel, Y. (2012). lavaan: An R Package for Structural Equation Modeling. *Journal of Statistical Software*, **48**(2), 1-36.
- 鈴木真吾・小川俊樹 (2008). 中学生における自尊心と被受容感からみたストレス反応・本来感の検討 筑波大学心理学研究, **36**, 97-104.
- 高比良美詠子・安藤玲子・坂元 章 (2006). 縦断調査による因果関係の推定——インターネット使用と攻撃性の関係—— パーソナリティ研究, **15**, 87-102.
- 竹中晃二・富永良喜 (共編) (2011). 日常生活・災害ストレスマネジメント教育——教師とカウンセラーのためのガイドブック—— サンライフ企画.
- 田中沙依・下田芳幸 (2013). 中学生における友人に対する感情に関する研究——自己開示および本来感との相互影響性の検討—— 富山大学人間発達科学部紀要, **8**(1), 35-45.
- 遠矢幸子 (1996). 友人関係の特性と展開 大坊郁夫・奥野秀宇 (編著) 親密な対人関係の科学 誠信書房 pp.89-116.
- Watson, D., & Friend, R. (1969). Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of consulting and Clinical Psychology*, **33**, 448-457.
- 山本淳子 (2007). 教師の視点から見た思春期の子どもの評価に関する研究 香川大学教育実践総合研究, **14**, 93-100.
- 山本淳子・田上不二夫 (2002). 中学生の評価懸念の高さと自己概念特徴との関連 筑波大学心理学研究, **24**, 263-272.
- 有倉已幸 (2011). 生徒の仲間集団の排他性に関する研究 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, **21**, 161-172.

(2015年9月7日受付)

(2015年12月9日受理)